若者のための環境保護インターンシップを





境・野生動物を守る担い手となる人 学院で野生動物と人間の関係につい の100万人のキャンドルナイトなど、 環境サミットや、 アメリカに比べ遅れをとっていると 材の育成となると我が国はまだまだ る環境教育、そして将来の自然環 て学ぶなかで、私は若い世代に対す 高まっている。 環境への意識はわが国でもますます 7月に北海道洞爺湖で開催された しかしアメリカの大 恒例となった夏至

サスA&M大学、米国地質調査所 との州境)にて参加したインターン ップ国立レクリエーション地域(ニ カのデラウェア・ウォーター・ギャ プログラムについて紹介したい。こ ュージャージーとペンシルヴァニア ーンシップを推進するNGO、 一つの事例として、今春にアメリ 学生のための環境保護インタ

> にNGO、大学、そして政府組織が ある。全米各地から8人の環境問題 国立公園局による共同プログラムで そしてアメリカ合衆国内務省管轄の を育成しようとしているか痛感させ 本気で次世代の環境保護を担う人材 たプログラムで、アメリカではいか や野生動物について学ぶ院生を受け 人れて1週間行われた合宿トレーニ ングであるが、非常によく準備され

費)、公園内のロッジでの5日間の ばるニュージャージー州までの航空 リエーション地域までの交通費(私 の場合、フロリダの田舎町からはる 王催者が賄ってくれた。 宿泊代、そして朝昼夜の食費は全て 学生が住んでいる町からこのレク

保護学会の副代表、 ぶれである。アメリカで有名な自然 圧巻だったのが豪華な講演者の顔 第一線で活躍す

良(フロリダ大学大学院)

Green Forum

ロジェクトが課され、団結して未来 内してくれ、また別の日は学生にプ 園専属の自然ガイド員が公園内を案 内の議論だけでなく、 学生との議論に参加してくれた。室 体のリーダーなどが、文字通り全米 の国立公園の創立に尽力した市民団 る政府機関の研究者、 ことが求められた。 ション地域の代表もほぼ毎日講義や オーター・ギャップ国立レクリエー 各地から集結した。 デラウェア・ウ 公園管理について知恵をしぼっ 学生には常に講演者に挑戦する 一日は国立公 約40年前にこ

うになっていた。 研究者やレンジャーと交流できるよ 将来のために、この機会を積極的に と言われており、講義の後には毎回 コーヒータイムが設けられ、学生が 主催者側から学生に「あなた方の 人脈作りをしてください

の院生がインターン終了後にアメリ じられた。また、今回参加した全て の院生もおり、アメリカの最先端の でなく、私のような日本人や中国人 ようとする主催者側の意気込みが感 公園管理技術を世界中の学生に伝え 学生のメンバーはアメリカ人だけ

> めに最も必要としているものを組み 将来のための人脈作りも含め、 発行されることが約束されており、 に学生がキャリアを形成していくた を発表し、校正を受けた後に正式に の国立公園に関する学会誌に論文 まさ

> リカに比べ環境保護に関する分野へ 国立公園局など、政府機関も含めた つことの現れではないだろうか。 主催者側が学生を尊重する姿勢を持 込んだプログラムであった。 翻って、 我が国においては、 これは アメ

ンの院生が毎日講義を受けた家 この家は、アメリカで最初に森林の科学的管理 の必要性を訴えたギフォード・ピンショー(Gifford Pinchot:米国農務省山林局局長、ペンシルヴァニア州知 事)が幼少のころに過ごした場所で、国の歴史的建造物 にも指定されている。

か 要とされているのではないだろう である。このような学生の将来のキ ることをあきらめざるをえない現状 の若者は仕事として自然保護に係 ャリア形成のためにもなるインター ンシップは我が国においてまさに必

ものだったと思う。しかし、 取り組みは日本の中では優れている する学生のための環境保護インター 我が国においては、 馬野生生物保護センターが主催した など、明白な違いがあった。 カのそれに比べると規模も小さく 旅費や滞在費も全て学生の個人負担 ンシップは決して多くなく、 インターンに参加したことがある。 私は2004年に環境省管轄の対 政府機関が運営 対馬の アメリ

成するためにも、アメリカで行われ 保護への取り組みを推進させるなら ができる機会を積極的に提供して で活躍する専門家とともに職業体験 ターンシップを通じて若者が第一線 ているこのような学生のためのイン もし我が国が今後とも本気で環境 未来の環境保護を担う人材を育

くべきであろう

の就職先は少なく、これを志す多く